

523  
- 018142

江入楚

幕本

*[Faint, illegible handwriting on the left page, possibly bleed-through from the reverse side.]*

*[Faint, illegible handwriting on the right page, possibly bleed-through from the reverse side.]*

幕末

十六歳

源氏為中將

龍人少將為及中將

光源氏君之称号之夏

夏雨夜之物語之夏

及中將見源氏之君之艶書也

右馬以友式部並參院伊物忌夏

女房之品定再往問答之夏

右馬頭物語女兩人事

頭中將之物語之女之夏 夕顔上是

式部並物語之女ノ事

翌日源氏君退出奏上宿所夏

其夜為中神之方遠一宿紀伊守中川家之夏

同時始見空蟬君子

空蟬君於中納言右衛門侍女為伊守之室

小君初參源氏

小君空蟬君之身也

小君傳源氏之書於空蟬君夏

源氏又為方遠宿中川之家夏

空蟬君不見春夏

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

第本

以奇為春名

とくあはれんことをしつてこれあはれなりやめくまひのりぬ

源氏君れ奇し

奇と云く春れ名をいれ春れ夜ぬれまふさくあはれ源氏十六年中將

と中は時の事し比る六月後十月とみし多う相臺春は十二歳とれ事

有ゆは十三四の之すはれ事ハ物候は不見あはれ但相臺れ末

此類とい春の始れ候の初子といれ事ハこのりつきたり

源氏十六歳れ事ハ

春れ名乃事

わらふとわらふはまきやうとまくとまらうとてそは格の此方と

是則、ありとていんてはるをぬとてをまるとしてどとあはれ第

本れ事ハ抄物末にうら

とく事とて名をいれ物候の大まよはあせうとをこれ記す

夢れ浮指事とて思ひし又人なれとも皆くあはれをこれ記す

金く一部はわらうとまきつて相臺れ春はこれなり

紙記云は春とてくまといはる中はの宿を源氏と空蟬

との諸卷此所を付するは是別の二つありと見えてある  
君の如くといふととあるふし定むるもあらず  
みことハ凡そとあるんはしは是れ名カレとけ物後五十  
四帖よおし月を若くはハハ物後ハ幸よそある  
よそハあまも又昔ありとすしと面ハあそり  
相臺此凡そと進死りかこりなり花後氏とす  
友並相此跡とす一葉早此跡とす  
よそハあまも又昔ありとすしと面ハあそり  
とすれハ物にけり一部の題名ハ天名ハ四とす中  
亦有亦空門は物にけり一葉早此跡とす  
一部の名カレ物にけり上下ハ人ハ物にけり  
是れハ物にけり物にけり物にけり物にけり  
又胡蝶ハ物にけり物にけり物にけり物にけり  
ハの及ハ物にけり物にけり物にけり物にけり  
是れハ物にけり物にけり物にけり物にけり  
物にけり物にけり物にけり物にけり

巻之名之更

如 相臺卷二十二葉  
あまも又昔ありとすしと面ハあそり  
とすれハ物にけり一部の題名ハ天名ハ四とす中  
亦有亦空門は物にけり一葉早此跡とす  
一部の名カレ物にけり上下ハ人ハ物にけり  
是れハ物にけり物にけり物にけり物にけり  
又胡蝶ハ物にけり物にけり物にけり物にけり  
ハの及ハ物にけり物にけり物にけり物にけり  
是れハ物にけり物にけり物にけり物にけり  
物にけり物にけり物にけり物にけり

巻之名之更

は海もあはれん巨きてれ家の下よ  
んもあまも又昔ありとすしと面ハあそり  
よ同ハ畧之或説此卷ハ相臺の巻此並とす  
世帯れあまも又昔ありとすしと面ハあそり  
とすれハ物にけり一部の題名ハ天名ハ四とす中  
亦有亦空門は物にけり一葉早此跡とす  
一部の名カレ物にけり上下ハ人ハ物にけり  
是れハ物にけり物にけり物にけり物にけり  
又胡蝶ハ物にけり物にけり物にけり物にけり  
ハの及ハ物にけり物にけり物にけり物にけり  
是れハ物にけり物にけり物にけり物にけり  
物にけり物にけり物にけり物にけり

図書云此巻とは花此一巻よあまも又昔ありとすしと面ハあそり  
ふあも不及是とは花の開物量  
よ始て是れ浮橋よ終ふし  
此巻と序分とハ物後一部ハ極の  
又け巻とは花の二ノ巻よあまも又昔ありとすしと面ハあそり

又け巻とは花の二ノ巻よあまも又昔ありとすしと面ハあそり  
とすれハ物にけり一部の題名ハ天名ハ四とす中  
亦有亦空門は物にけり一葉早此跡とす  
一部の名カレ物にけり上下ハ人ハ物にけり  
是れハ物にけり物にけり物にけり物にけり  
又胡蝶ハ物にけり物にけり物にけり物にけり  
ハの及ハ物にけり物にけり物にけり物にけり  
是れハ物にけり物にけり物にけり物にけり  
物にけり物にけり物にけり物にけり

此春さぬく此人名つと物さぬく事みそつらふ  
とぬくつさぬく物さぬく事みそつらふ  
又相壺と云ふは壺と云ふ名に相壺との名を  
つらふと云ふは壺と云ふ名に相壺との名を  
つらふと云ふは壺と云ふ名に相壺との名を

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

光原氏名のことと云ふは光原氏名のことと云ふは

は光原氏と云ふ名に光原氏と云ふ名に

光原氏と云ふ名に光原氏と云ふ名に

光原氏と云ふ名に光原氏と云ふ名に

光原氏と云ふ名に光原氏と云ふ名に

光原氏と云ふ名に光原氏と云ふ名に

光原氏と云ふ名に光原氏と云ふ名に

光原氏と云ふ名に光原氏と云ふ名に

光原氏と云ふ名に光原氏と云ふ名に

光原氏と云ふ名に光原氏と云ふ名に

光原氏と云ふ名に光原氏と云ふ名に

光原氏と云ふ名に光原氏と云ふ名に

光原氏と云ふ名に光原氏と云ふ名に

光原氏と云ふ名に光原氏と云ふ名に

光原氏と云ふ名に光原氏と云ふ名に

昭外如頑愚無名天地之始有名万物之母天玄其在人心則  
寂然不動之地太極未分則安有春秋冬夏之名寂然不動則  
安有仁義禮智之名故云先名天地之始其謂之也昭以為此  
之喻也既有陰陽之名則千變萬化皆由此出既有仁義之名  
則千條萬端自此而始天地者非專言天地 論語子路篇云  
子貢問曰鄉人皆好之何如子曰未可也鄉人皆惡之何如子  
曰未可也不如鄉人吾者好之其不善者不如之要之也 又  
未大者不庇小庇 私家老子徑下引之引之引之引之引之引之

此名色何事りといふはあはれなり世はあはれなり  
名もあはれなり 又名もあはれなりといふはあはれなり  
子孫万端此といふはあはれなりといふはあはれなり  
を引ふ世居れ人の言一極はあはれなりといふはあはれなり  
貢と人皆好も勢り何やあはれなりといふはあはれなり  
不可と云ふはあはれなりといふはあはれなり  
よきことあはれなりといふはあはれなり  
れんよあはれなりといふはあはれなり

人の原のころといひはあはれなりといふはあはれなり  
大業をとりしつたあはれなりといふはあはれなり  
れはあはれなりといふはあはれなり  
とくはあはれなりといふはあはれなり  
けはあはれなりといふはあはれなり  
いふはあはれなりといふはあはれなり

此初より好まれ事といふはあはれなりといふはあはれなり  
愛よりいふはあはれなりといふはあはれなり  
家事よきあはれなりといふはあはれなり  
とありはあはれなりといふはあはれなり  
あはれなりといふはあはれなり  
いふはあはれなりといふはあはれなり  
いふはあはれなりといふはあはれなり

祇注原も好まれ人ありて下に好まれ人ありて  
私をいひはあはれなりといふはあはれなり







一 我元六月とありあり降つきて六月は晴るるれ

内裏之御物忌也

物忌之夏何妻

伽毘羅衛國之大鬼神王之名也誓願利

益衆生若人宅物恠要夢未之時書吾名立門他家鬼神不令

來可令守護也 義津三花況してさうきふ略して書し

は内裏物忌の時より多う義津三花の世の時より多う物忌

沖ノ字ツク民柳の枝とすつらに管は作つて内冠の纏は

さふ式又たの内袖は白紙は書てつひらる又少者の内簾は

これと付但二間は一つ巻紙首は巻く物忌とて内簾は

つひ冠あやまらざるこころをさすつきて目こきりゆし

つひはさしと冠はさし取しは巻くさすこれ白くさす

物忌は徳陳はれと立沖簾は召して物忌とつり也紙は

く外宿のくさすよる小夜はくさすは主上ゆめく簾

あつりあつり毎日は物忌とさ簾をわけも母をば簾は皆

くさすく物忌とほく二百切簾出入れ召しては簾は上れ小夜は

くさすく物忌とほく二百切簾出入れ召しては簾は上れ小夜は

くさすく物忌とほく二百切簾出入れ召しては簾は上れ小夜は

くさすく物忌とほく二百切簾出入れ召しては簾は上れ小夜は

くさすく物忌とほく二百切簾出入れ召しては簾は上れ小夜は

くさすく物忌とほく二百切簾出入れ召しては簾は上れ小夜は

くさすく物忌とほく二百切簾出入れ召しては簾は上れ小夜は

くさすく物忌とほく二百切簾出入れ召しては簾は上れ小夜は

くさすく物忌とほく二百切簾出入れ召しては簾は上れ小夜は

くさすく物忌とほく二百切簾出入れ召しては簾は上れ小夜は

くさすく物忌とほく二百切簾出入れ召しては簾は上れ小夜は

くさすく物忌とほく二百切簾出入れ召しては簾は上れ小夜は

くさすく物忌とほく二百切簾出入れ召しては簾は上れ小夜は

くさすく物忌とほく二百切簾出入れ召しては簾は上れ小夜は

くさすく物忌とほく二百切簾出入れ召しては簾は上れ小夜は

くさすく物忌とほく二百切簾出入れ召しては簾は上れ小夜は

くさすく物忌とほく二百切簾出入れ召しては簾は上れ小夜は

母相門の内よりとるれが交りつとてつ後よ、波江のを改む  
とを養上れ先源といひて、仍地傳れたるは、此子の極よ、  
あつてとて、くすすつて

万 折家れ是より、はまよ、中早よ、身母、つた、安

忠仁公 照宣公 法性公 謙徳公 定美公 畧之

左れぬ、此のりりつ、はま、折れ、妹と

二条相おけ何右太左し は、四の、若中、おれ、家

此四君へ、源、此、奏、上、う、と、し、き、や、う、り、は、中、将、も、た、左

甲、中、将、れ、又、た、左、右、の、亭

家、料理、甚、仙、意、室、礼

元、元、左、右、の、亭、乃、中、将、の、居、り、う、さ、な、志、の、り、は、居、り、ぬ、し

君、源、此、奏、れ、う、さ、な、志、の、り、は、居、り、ぬ、し

学、元、左、右、の、亭、乃、中、将、の、居、り、う、さ、な、志、の、り、は、居、り、ぬ、し

お、元、左、右、の、亭、乃、中、将、の、居、り、う、さ、な、志、の、り、は、居、り、ぬ、し

信 勝 俊長 権 日本記 花頭し 弐、元、左、右、の、亭、乃、中、将、の、居、り、う、さ、な、志、の、り、は、居、り、ぬ、し

此、元、左、右、の、亭、乃、中、将、の、居、り、う、さ、な、志、の、り、は、居、り、ぬ、し

ま、元、左、右、の、亭、乃、中、将、の、居、り、う、さ、な、志、の、り、は、居、り、ぬ、し

角、元、左、右、の、亭、乃、中、将、の、居、り、う、さ、な、志、の、り、は、居、り、ぬ、し

て、元、左、右、の、亭、乃、中、将、の、居、り、う、さ、な、志、の、り、は、居、り、ぬ、し

是、元、左、右、の、亭、乃、中、将、の、居、り、う、さ、な、志、の、り、は、居、り、ぬ、し

つ、元、左、右、の、亭、乃、中、将、の、居、り、う、さ、な、志、の、り、は、居、り、ぬ、し

一、元、左、右、の、亭、乃、中、将、の、居、り、う、さ、な、志、の、り、は、居、り、ぬ、し

物、元、左、右、の、亭、乃、中、将、の、居、り、う、さ、な、志、の、り、は、居、り、ぬ、し

原、元、左、右、の、亭、乃、中、将、の、居、り、う、さ、な、志、の、り、は、居、り、ぬ、し

沖、元、左、右、の、亭、乃、中、将、の、居、り、う、さ、な、志、の、り、は、居、り、ぬ、し

お、元、左、右、の、亭、乃、中、将、の、居、り、う、さ、な、志、の、り、は、居、り、ぬ、し

問、元、左、右、の、亭、乃、中、将、の、居、り、う、さ、な、志、の、り、は、居、り、ぬ、し

ら、元、左、右、の、亭、乃、中、将、の、居、り、う、さ、な、志、の、り、は、居、り、ぬ、し

仲 厨子

あつたつたなるみ  
さうめんききとこ

教書し文紙りちるし

海の中におよそやそとさもあつたつたなるみ  
さうめんききとこ

其の中に見らるるまきとさうめんききとこ  
又及中お初し

わがわがつとさうめんききとこ  
又及中お初し

わがわがつとさうめんききとこ  
又及中お初し

わがわがつとさうめんききとこ  
又及中お初し

わがわがつとさうめんききとこ  
又及中お初し

わがわがつとさうめんききとこ  
又及中お初し

祇住さうめんききとこ  
又及中お初し

おほきとこ  
又及中お初し

これに二れまられ  
又及中お初し

わがわがつとさうめんききとこ  
又及中お初し

わがわがつとさうめんききとこ  
又及中お初し

わがわがつとさうめんききとこ  
又及中お初し

中にいひあはれを  
みのまを推しよす年おのひらりつとまじ  
てはたまはれぬ  
一而してつらなる命をささるるつらみ  
しむるあつて  
源の用は奇物とていふもあつておは  
ふしむるあつておはれぬとほりつとまじ  
よあつてつらなる命をささるるつらみ

おにいひて  
源の初し 何に下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり

おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり

おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり

おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり

おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり

おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり

おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり

おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり

おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり

おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり

おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり

おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり

おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり  
おに下 下は初はふらり





ろま人をいふ優りといふれはるるといひてよれ人といふす  
きしきとせり此二の果ハ初め一ににきくまきと云ひ  
まろきとていれて下らうしてそのわくまつてあまき  
義云論法云上智与下愚不移 注上智不降於下愚雖教無成  
又班固古今表書云 上聖人上中仁人上下智大中上中々  
中下下上下中下々愚人初教曰  
上とれ聖人とていれ五人とていれたる物

人の品あり  
或抄仲孫子位ゆきまの長下よりりてたひよりりて後  
とせしとていれはるるといひていれはるるといひて  
そのつゝ 自然とていれはるるといひて  
その品あり 氣ケイ日本紀 形勢 新羅王記 景氣  
こころあり 無此世之 相産卷二 ころありとていれはるるといひて  
たありていれはるるといひていれはるるといひて  
中とありはるるといひていれはるるといひて

又ありていれはるるといひていれはるるといひて

ぬまのよとていれはるるといひていれはるるといひて

おのき といれはるるといひていれはるるといひて

一のたよりし 宣健中ノ中あり中るはあり

きりれきりし 花下ノきりし下病れ持世といふはあり

はしとていれはるるといひていれはるるといひて

お下おれ人のすゞのよりありありとていれはるるといひて

中なまきとていれはるるといひていれはるるといひて

ありとていれはるるといひていれはるるといひて

くむるけなら 中おれおれありありとていれはるるといひて

らとていれはるるといひていれはるるといひて

そのきりくやりに 源の初 花 廿四段

いりていれはるるといひていれはるるといひて

地中行事とていれはるるといひていれはるるといひて



是の将校の多う人なれと母はおろして友位と申す多うおん  
上はこれ命の多うおらさるり多うと申す位と申す切と選教令  
位の多うおらさるり早の字と申すりや申す位也

又か人へのりん多うおん

日直人法をまじ 中院変書云々

花 かりとくしき日んれ 伊勢お法をまじあつて母がじ友位  
り人との将校をまじと申すは母のひく友位をく

まじみり多うおらさるり松の二はあつてあつてあつてあつて

二層のあつて事を云次よりまじつてつてつてつてつてつて

事と今又二はあつてつてつてつてつてつてつてつてつて

あつとなつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

是の法をまじつてつてつてつてつてつてつてつてつて

九のしつちの多うおれせり

九馬乃 友式船連し

此の同答れ中將にぬ人の多うおれ  
史書原中將にぬ人の多うおれ

合りぬと云ふれつてつてつてつてつてつてつてつて

世の多うおれつてつてつてつてつてつてつてつて

中おまらつてつてつてつてつてつてつてつてつて

いとまじあつてつてつてつてつてつてつてつて

関書云々あつてつてつてつてつてつてつてつて

かりとのりれつてつてつてつてつてつてつてつて

義之臣氏二ヶ條のつてつてつてつてつてつてつて

あつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

ちつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

義 非ふれ登用其男にさつてつてつてつてつてつて

祇臣秘抄は同し 前の臣は二ヶ條のつてつてつてつて

きつうのくもみち式部多きれは人よゆつて是は民も  
る乃物くくしんすれにやそくけくして尸ゆりもくし  
十八回答るも是外一段の及知し

※

苗叶ののりくく世書かす所のりもそれくく色力人  
さひくと既し果をあくくてあはれひあはれすまはゆき  
私云さくくく友佐とあやとくくくくくくくくくくく  
人長あくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
又もなゆんくくくくくくくくくくくくくくくくく

※

未橋の書陰交れ女室蝶の仲細言女と信成  
書よかりの影なり  
世にありゆりくく 何便多す 万葉し

世にありゆりくく

んをくくくく

くくくくくく

※

又もくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
つまそくくくくくくくくくくくくくくくくく  
何事くくくくくくくくくくくくくくくくくく  
不及くくくくくくくくくくくくくくくくくく  
はらもくくくくくくくくくくくくくくくくく  
後必年くくくくくくくくくくくくくくくくく  
祇は未斬くくくくくくくくくくくくくくくく  
乃陽疾の影くくくくくくくくくくくくくくく  
史勢をつくくくくくくくくくくくくくくく  
愚業受れくくくくくくくくくくくくくくく  
見これ初の固れゆりもれくくくくくくくく  
後少書未け皆也し ねと但目なれくくくく  
人の西くくくくくくくくくくくくくくくく  
きるさくくくくくくくくくくくくくくくく  
さくくくくくくくくくくくくくくくくく  
きくくくくくくくくくくくくくくくく  
あくくくくくくくくくくくくくくくく

けあの能よりあまそて人君も民も初し

くくくくくく

不及くくくく

はらもくくく

※

※

※

※

※

※

※

※

※

※

※



お〜火〜  
か〜と〜と〜  
ま〜つ〜と〜  
い〜お〜し〜  
ま〜く〜と〜  
鑑三手りし如名  
箋云上件乃評瑞夫人と零落の葉と川〜中れあよ  
あ〜或〜又〜中〜た〜の〜娘〜と〜  
あ〜と〜て〜源〜の〜批判〜の〜刻〜し

い〜お〜し〜  
ま〜く〜と〜  
鑑三手りし如名  
箋云上件乃評瑞夫人と零落の葉と川〜中れあよ  
あ〜或〜又〜中〜た〜の〜娘〜と〜  
あ〜と〜て〜源〜の〜批判〜の〜刻〜し

新撰樂記云富饒三手りし

あ〜と〜て〜源〜の〜批判〜の〜刻〜し  
こ〜也〜人〜忠〜い〜ん〜  
ほ〜  
好〜交〜る〜  
女〜れ〜さ〜の〜  
ね〜と〜し

こ〜也〜人〜忠〜い〜ん〜  
ほ〜  
好〜交〜る〜  
女〜れ〜さ〜の〜  
ね〜と〜し  
と〜中〜将〜の〜い〜ん〜  
と〜中〜将〜の〜い〜ん〜

い〜の〜お〜世〜れ〜  
お〜  
お〜  
お〜

此段女之宮より高きるま在境をれ會女をそま〜

い〜の〜お〜世〜れ〜  
お〜  
お〜  
お〜  
お〜

い〜の〜お〜世〜れ〜  
お〜  
お〜  
お〜  
お〜

い〜の〜お〜世〜れ〜  
お〜  
お〜  
お〜  
お〜

そそせしむるもさうもあら  
これならぬとて  
むらうのうらむ

いそつらうりきり  
いそつらうりきり  
いそつらうりきり

あふりお遠き  
あふりお遠き  
あふりお遠き

父れと老  
寺  
後式部

祇住是の科  
祇住是の科  
祇住是の科

つらうりきり  
つらうりきり  
つらうりきり

これきん  
これきん  
これきん

或抄  
或抄  
或抄

七  
後式部

いそつらうりきり  
いそつらうりきり  
いそつらうりきり

祇住是の科  
祇住是の科  
祇住是の科

あふりお遠き  
あふりお遠き  
あふりお遠き

寺  
後式部

一禪  
一禪  
一禪

カバノ... 小畑とて有但... 或抄淨説... 色くひ... 其物よ... 色海の... 其の... 史記... 可也... 死ノ... 女...

此原氏はお南... 祇住原氏と女... 義女... 凡ノ人... 一或れ... 又孔子... と云... 子れ中... 人を...

か... 此段... ま... 幾... 卿大夫...

あ... 此段... ま... 幾... 卿大夫...

あ... 此段... ま... 幾... 卿大夫...

あ... 此段... ま... 幾... 卿大夫...

あ... 此段... ま... 幾... 卿大夫...

あ... 此段... ま... 幾... 卿大夫...

あ... 此段... ま... 幾... 卿大夫...

あ... 此段... ま... 幾... 卿大夫...

あ... 此段... ま... 幾... 卿大夫...

あ... 此段... ま... 幾... 卿大夫...

あ... 此段... ま... 幾... 卿大夫...

あ... 此段... ま... 幾... 卿大夫...

あ... 此段... ま... 幾... 卿大夫...

あ... 此段... ま... 幾... 卿大夫...

世れん先

茂玄殿高宗之得傳説周文王得大之望之類也

まふのうつあ

ちまはせれけりる思ふ

されと〜〜とて曰うう〜として世中を返つ〜

死

天下れ政を大政友を是と〜〜百万枝れ政務なるよ

〜〜と云ぬ〜と云て曰り〜ひも〜〜

〜〜と云ぬ〜と云て曰り〜ひも〜〜

ふみ多也〜

茂云孔子之門人之中モ 德行ニ顔淵関子 奮冉伯牛仲弓

言語ニ宰我子貢 政変ニ井有季路 文学ニ子游子夏

十哲之中に三人あり〜〜と云て曰り〜ひも〜〜

智恵中一舍利弗 多聞中一迦葉 神通中一目蓮ありて

〜〜と云ぬ〜と云て曰り〜ひも〜〜

〜〜と云ぬ〜と云て曰り〜ひも〜〜

上合淳徳以遇其下々懐忠信以

変其上史記於河よ〜

〜〜と云ぬ〜と云て曰り〜ひも〜〜

〜〜と云ぬ〜と云て曰り〜ひも〜〜

先教を治先教を治めんと云り〜

詩序以一家之變態一國之變ト云り 凡傳曰詩云則寡妻至

于兄弟以御千家并 詩大雅寡妻謂大妣也言文王之教自

近至遠也

天下ニ廣〜と云て曰り〜ひも〜〜

〜〜と云ぬ〜と云て曰り〜ひも〜〜

〜〜と云ぬ〜と云て曰り〜ひも〜〜

〜〜と云ぬ〜と云て曰り〜ひも〜〜

〜〜と云ぬ〜と云て曰り〜ひも〜〜

〜〜と云ぬ〜と云て曰り〜ひも〜〜

日

〜〜と云ぬ〜と云て曰り〜ひも〜〜

〜〜と云ぬ〜と云て曰り〜ひも〜〜

〜〜と云ぬ〜と云て曰り〜ひも〜〜

〜〜と云ぬ〜と云て曰り〜ひも〜〜

〜〜と云ぬ〜と云て曰り〜ひも〜〜

世の中とては且初しき事と云ひてそれいふに世の中  
はさういふに世の中は後撰意四々いふに世の中は  
いふに後ねた人忠つるりなり 是は初は目し  
祇住り人すゝの家つ回よ物を依解きなり 世の中は  
しめめいひるにさういふにやさんとは世の中は  
世がかりけりさういふに世の中は世の中は  
たうたれり世の中は世の中は世の中は  
てとて世の中は世の中は世の中は  
世の中は世の中は世の中は世の中は  
いふに世の中は世の中は世の中は

かれゆゑに世の中は世の中は世の中は  
事つるに世の中は世の中は世の中は  
とて世の中は世の中は世の中は  
たれに世の中は世の中は世の中は  
とて世の中は世の中は世の中は

いふに世の中は世の中は世の中は  
いふに世の中は世の中は世の中は

いふに世の中は世の中は世の中は  
いふに世の中は世の中は世の中は

いふに世の中は世の中は世の中は  
いふに世の中は世の中は世の中は

いふに世の中は世の中は世の中は  
いふに世の中は世の中は世の中は

いふに世の中は世の中は世の中は  
いふに世の中は世の中は世の中は

いふに世の中は世の中は世の中は  
いふに世の中は世の中は世の中は



或抄於る所の如し不定に持たれ申すと修く世と能く見  
る所の如くま申すなまじし

君の如れと申すはさし  
小物之も女れがれ申すと申さんとてくそう原の中おとさし  
申すはさしと申すは

祇園はさしと申すは  
申すはさしと申すは

申すはさしと申すは  
申すはさしと申すは

申すはさしと申すは  
申すはさしと申すは

申すはさしと申すは  
申すはさしと申すは

申すはさしと申すは  
申すはさしと申すは

申すはさしと申すは  
申すはさしと申すは

申すはさしと申すは  
申すはさしと申すは

申すはさしと申すは  
申すはさしと申すは

とさうして同心のさうりるまじ表裏多別しきつりつれはよ五ツ  
三日月新潔白法師三日月をうけつるよえんよ三日月つよか  
れに三日月めいさうとんそて居ようれ三日月りひつら  
といされきさにいひさしむるこころし皆を慮ゆりて実  
よなあれはこころしとすもひのひらうひく時をん  
わそとけそん危とゆはん御よれ御りうさう第一の難し  
日しえろつ支きれるめあつとるこ亦ふよよと世能い  
今てき知れぬしは風流れさうんれとてか御りあよ  
りしとさうりんそそふくれまよむ御きけりありし花三  
那れ事しとすもさうとよとさうぬやうにききて居よ  
ついでとさうめあやうわう但中はさう  
あまけ二段一那れみれよこもさうとあまのりかたれをい  
秘よふとハアとさうなとありのりかたりつる御りさう言  
かとりつりつとさうむかつとさうに行せあんとさうれさ  
くまもせてさうやと出せあんとさうはよ何ひらひとめを  
ぶつとる御し又みりのるれとさうとさうとさうとさうと  
とくさうとさうとさう無使しと為

とくさうとさうとさう無使しと為

ねんせカタナキ心

私云美ノ美娘よあつよあて秋やと種さう物と奥ノ美  
点とくさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと  
めとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと  
尺やとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと  
あつれはこころしとすもひのひらうひく時をん  
とりとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと  
一書れ難とせんとしらつらとさうとさうとさうとさうと  
らとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと

とさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと

花云とさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと  
あれはこころしとすもひのひらうひく時をん

美云がの先ハ斜し斜カハカハああぬこたさうとさうと  
らぬのあま事し

美云がの先ハ斜し斜カハカハああぬこたさうとさうと  
らぬのあま事し  
美云がの先ハ斜し斜カハカハああぬこたさうとさうと  
らぬのあま事し

此書と云ふ人つと云ふ事と云ふ人との相れ後知るる事と云  
折るれ花を葉の情と云ふ或は云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
ある事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
あれと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
此の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
けは是れ向し後抄を遠仍不載と  
是云は怪を云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云

まじしめし記をらと云ふ事  
其の義を云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
死 是れ云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
まなつと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
みんまじしめし記をらと云ふ事  
\* 其の後を身にならむ事と云ふ事と云  
ろつたまじしめし記をらと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
るたゆいひく事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
いさうなれ後と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云

是云貪相なりと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
事白本の初し 後條ありと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
難騷上恒壽抱全他條号吾獨窮困守此時也  
是云如在ヤキト云モ曰し 秘抄曰し

うらと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
折るれよつと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
折るれよつと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
おんやけと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
會せし人の形迹れ祈りし  
かゝる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
ちりてらん人なり 書置れ事し

\* 世方れうまきと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
是れ云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
折るれよつと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
折るれよつと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云

あつちのりやうく

元公方事よけて家版の立し

\*五人をたつら人のたれにうらうらとみ又傍家朋友あまに  
い傍事たれま何の書たしにたけりともとくまきと  
あけりまきせん

安云これ上院の女に味法屋は

て人のそゆとたままらぬなり  
はゆとあちちのりまき

安云はまはあ人の術しうあまにけし  
よりあち術しつあまきとあまきしけ改るた捨喰女あ  
あまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよ  
祇臣は改るたゆひらりやうあまきよあまきよあまきよ  
らあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよ  
もして大あけまにみてもあまきよあまきよあまきよあまきよ  
き女たしにいつひあまきよあまきよあまきよあまきよ  
まきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよ  
てたしよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよ  
あまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよ

大これ事いさあ

たまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよ

あまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよ

あまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよ

あまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよ

あまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよ

あまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよ

あまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよ

あまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよあまきよ

くふさうじつひてらんちのい  
こあてかんとたさうまれ

とくちうきふ程のよそとみんまがゆるうまれたいもやあそ  
れきうつねまればあるんぶんらうとくちうまじとれく

ま中にもうまじとあまうあをいづあ  
箋云上件の段よひころそしあ給うめはあつるるんは

あひえさう中しあおらうまてあまよそとくちうあま  
あしんんかき事あはそとくちうあまよそ

つりあひいふ  
女の志りうまれあつれかたさ  
んり物とらいつあそよひふいさうとくちうまじと  
たれあまうあ使たうらうらかまあ

そののしきまがきとわ  
箋云この用そ  
或祝とわ初しりり  
つらうとくちう  
つらうとくちう  
つらうとくちう  
つらうとくちう

つらうとくちう  
つらうとくちう  
つらうとくちう  
つらうとくちう

つらうとくちう  
つらうとくちう  
つらうとくちう  
つらうとくちう

つらうとくちう  
つらうとくちう  
つらうとくちう  
つらうとくちう

つらうとくちう  
つらうとくちう  
つらうとくちう  
つらうとくちう

つらうとくちう  
つらうとくちう  
つらうとくちう  
つらうとくちう

つらうとくちう  
つらうとくちう  
つらうとくちう  
つらうとくちう

手  
此詞一都之肝心也  
此詞一都之肝心也  
此詞一都之肝心也

と衆唯心万法唯識之心  
と衆唯一心々外在別法三衆唯  
心万法唯識之心  
心万法唯識之心  
心万法唯識之心

心万法唯識之心  
心万法唯識之心  
心万法唯識之心  
心万法唯識之心

さういふ時分の事ふしとそふ下そふひ入がこれ不念ぬ  
日ふれ一川重みて申しく自余の自念の庄敷なりとこ  
そくら移しく移らけりま

何 傷人 昇紀 傷子 一

論しやし 巧調さや也 論語註云 傷人口 鋒捷 給教 爲氏

不憎也 又云 傷口也 又云 傷人 假仁者 之色行之 則疑

花 口き 切め しまん 移ら 衆人 と云 此れ ころ 上人 をいふ

何 打 山の 此れ ころ ころ の 二 のり して ころ ころ にも 移ら 衆人 此

これ ころ ころ ころ ころ と云 此れ 衆人 色 不 明 して あり ころ

ころ ころ ころ ころ 二面 と云 あり ころ 衆人 じま ころ ころ ころ

いひ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

おま ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

此 ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

わ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

あゝ縁こゝろまきり人をもつ連る事れ下へえさるはさふんと  
今案見さむつて局々の志はれりあられつて折のこゝろを  
いふて案智をよと死した幸ある事と云下れ初は見え不  
しよそはさきとよとつてのうらつての心

幾云こゝろか、不変し標し ねえ折のこゝろかなといふ  
せゆは不変義しつととつての心ねえとよとつての心  
のれこゝろにまゐるにまゐる人ささかかなる様をささかを  
見え不つて肉とまゐる一保つてにまゐるなり

ふろこゝろよさひあむら 是と又人よ一恨よさひあむら  
あつち中ひらつたはたひあむらといふ  
ごんかゝいあゝとこゝろまゝの案

あゝれなるまのよとよとつての心  
ぬこそのの心とあむらとよとつての心  
まれらる人まゝとよとつての心 或は説は能たふらとよとつての心  
けこゝろハむらつた事とよとつての心あむらとよとつての心

らさひらるれぬぬは、移るよとよとつての心  
或は説は能たふらとよとつての心  
かゝも各やれまゝ

あゝ死山里よとよとつての心 是は能たふらとよとつての心  
まゝとよとつての心とよとつての心  
祇は能たふらとよとつての心

あゝとよとつての心 是は能たふらとよとつての心  
まゝとよとつての心とよとつての心  
あゝとよとつての心

あゝとよとつての心 是は能たふらとよとつての心  
まゝとよとつての心とよとつての心  
あゝとよとつての心

あゝとよとつての心 是は能たふらとよとつての心  
まゝとよとつての心とよとつての心  
あゝとよとつての心

くさくさうかめん

是は女うのまへに

はくまき事

は男れ女よをうつて

人のつと

女れれとほおひ

らぬぬられをうつて

しはき男るれはひ

種ぬらうと決ま

かたれれよのさひ

是は女れをう

きうらうとられ

ゆめは男れを

らあやあ

はれと君を

のこし

あそれを

あそれを

あそれを

あそれを

くろく

くろく

くろく

くろく

くろく

くろく

くろく

くろく

くろく

くろく

くろく

くろく

くろく

くろく

くろく



類聚ウタハキシム 頤威足 文選 八也云平則夕し 潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

頤威足 文選 八也云平則夕し 潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

潜ハ 涘流白詩 潜然出涘 後悔れおるる也  
去卷又 版下白

おたりし事しきりたより下れ初よと何んわりともくらん討を  
と見るさしきらん中こそたれつゆい長あつめさつらひし  
居るもたさそむらうゆらんもやそめひさひく

は破徳本にむらうゆらんやそめひさひく  
めつらゆらんやわくそめひさひく  
本は兼定とむらうゆらんゆれ初めされもけ初を尼よちさそむ  
らうゆらんさひさひさひあわらうらうとさふ  
ゆれあつてさひさひさひさひ

初んふらうめさつらひさひさひ  
めひさひさひさひさひさひ  
ゆらさるるもさしきらんさしき伊勢初徳よ兼平を捨てお  
女又つらひさひさひさひさひさひさひさひさひさひさひ  
あつんとさふゆれさしきらんさしきらんさしきらんさしき  
らうらうやれ勢しそつらひさひさひさひさひさひさひさひ  
あつ終るぬとせめさつらひさひさひさひさひさひさひさひ  
とやそめひさひさひさひさひさひさひさひさひさひさひ

さしきらんさしきらんさしきらんさしきらんさしきらん  
所詮大言中書無きさしきらんさしきらんさしきらんさしき  
れいきさしきらんさしきらんさしきらんさしきらんさしき  
むらうらうさしきらんさしきらんさしきらんさしきらん  
さしきらんさしきらんさしきらんさしきらんさしきらん  
又たのめさしきらんさしきらんさしきらんさしきらん

紙は兼定にむらうゆらんゆれ初めされもけ初を尼よちさそむ  
らうゆらんさひさひさひさひさひさひさひさひさひさひ  
さしきらんさしきらんさしきらんさしきらんさしきらん  
さしきらんさしきらんさしきらんさしきらんさしきらん  
あつ終るぬとせめさつらひさひさひさひさひさひさひ  
とやそめひさひさひさひさひさひさひさひさひさひ

さしきらんさしきらんさしきらんさしきらんさしきらん  
さしきらんさしきらんさしきらんさしきらんさしきらん  
さしきらんさしきらんさしきらんさしきらんさしきらん  
さしきらんさしきらんさしきらんさしきらんさしきらん  
さしきらんさしきらんさしきらんさしきらんさしきらん  
さしきらんさしきらんさしきらんさしきらんさしきらん

ふらふらと一しむるに方上何とてつらぬぬよかなるく一さ  
れに眼あよ別々もさし見きぬさゆしてささけさうら  
て捨つぬぬもさし見きぬさゆしてささけさうら

ふらふらと一しむるに方上何とてつらぬぬよかなるく一さ

はとに思れぬれかのあはらけうあけさとしさしとて思れぬ  
のうらうらふささし思れぬさし思れぬさゆしてささけさうら  
さし思れぬさゆしてささけさうら

はとに思れぬれかのあはらけうあけさとしさしとて思れぬ

祇役とてと云ふあれあきされさし思れぬさゆしてささけさうら  
きささし思れぬさゆしてささけさうら

祇役とてと云ふあれあきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら  
あきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら

あきされさし思れぬさゆしてささけさうら



見よふも申すのてん根にさすもさすひるもしてさすんれて  
それさすもあじし 心不個少してあささの女さすもあじし

とさし下ノ初よとさすもさすもさすもさすもさすもさすも  
悪つんらり 面をも事阿しよの好ひて妹の養上よあささ  
さすもさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも

もさすも女男のさすもさすもさすもさすもさすもさすも  
養上のつひけらなは叶ひゆ道ニ中將の君我々妹の非善にこれさ  
めふらひひさつとさすもさすもさすもさすもさすもさすも

さすもさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも  
さすもさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも  
さすもさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも

さすもさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも  
早竟の理にもさすもさすもさすもさすもさすもさすも  
さすもさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも

さすもさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも  
養上れんじけさすもさすもさすもさすもさすもさすも  
けさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも

さすもさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも  
此さすもさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも  
さすもさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも

さすもさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも  
或抄源氏れ沖さるは段より養上よりさすもさすもさすも  
及中將のさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも

さすもさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも  
私云及中將のつは養上れつはさすもさすもさすもさすも  
小中よりんり初もさすもさすもさすもさすもさすもさすも

さすもさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも  
る及物さすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも  
は物定れ情士此名目先例未物得似令物之合之判若同事

輕転 日本紀 高橋れれ西京 一伝云鴨れうとさすもさすも  
て羽とさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも  
さすもさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも

家 養上れんじけさすもさすもさすもさすもさすもさすも  
さすもさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも

必 此さすもさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも  
さすもさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも

或抄源氏れ沖さるは段より養上よりさすもさすもさすも  
及中將のさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも

私云及中將のつは養上れつはさすもさすもさすもさすも  
小中よりんり初もさすもさすもさすもさすもさすもさすも

る及物さすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも  
は物定れ情士此名目先例未物得似令物之合之判若同事

輕転 日本紀 高橋れれ西京 一伝云鴨れうとさすもさすも  
て羽とさすもさすもさすもさすもさすもさすもさすも



ていふ本道論示も故のよききよれんを後氏中ぬの君子知  
らんと爲し改通す又あはれ中そて知ていふまじきあし  
ふらうののりしと及一切れ事れゆきぬあし

本れたのゆききよれん 必中云云カレたにあつて本れ道と云  
ぬれみおるをわかれぬとゆききよれんあつていふまじきあし

れを唯何れゆききよれんあつていふまじきあし

良道如削木帝死

良道如削木帝死 弑云帝死云明王之任人如巧匠之削  
木直者必為輮曲者必為矯長者為棟押短者為拱楹先曲直  
長短各有所施明王之任人亦猶如是故良道先棄士不以一  
害忘其善勿以小瑕掩其功

よらうの物を 是の本道は人の善れぬ

そのおと海をささくしぬ 是の善んはにらぬ物に定れ

りむらきされぬゆききよれん 側付兎角をいふまじきあし

宿 果礼宿老日 宿雪 荷日心 棄之凡被た道ノ事ハ何れ

ゆききよれぬゆききよれぬゆききよれぬ 傍教傳ハ能指言とされ

とらうゆききよれぬゆききよれぬゆききよれぬ 下界

或律儀モされぬゆききよれぬゆききよれぬ ぬ吳

たかゆききよれぬゆききよれぬゆききよれぬ ぬ吳

とたきたらうゆききよれぬゆききよれぬゆききよれぬ

ゆききよれぬゆききよれぬゆききよれぬゆききよれぬ

ゆききよれぬゆききよれぬゆききよれぬゆききよれぬ

大車としてゆききよれぬ 是の善んはにらぬ物に定れ

へるゆききよれぬゆききよれぬゆききよれぬゆききよれぬ

祇道らうゆききよれぬゆききよれぬゆききよれぬゆききよれぬ

ゆききよれぬゆききよれぬゆききよれぬゆききよれぬ

ゆききよれぬゆききよれぬゆききよれぬゆききよれぬ

私を調ぬれ中にて定むるに定むる物を強めしむる

上より一と別子とありし  
うはり一とありし

中より繪ありし 是より繪ありし

西官云畫所在式乾門内東腋清書所南有別當五位藏人領  
是より死よりえりてきて

是より死よりえりてきて 下繪と先皇よりしてかひの上の  
はらしねありしとていふ

平 是繪をより上りていふ

是繪をより繪れ事し人のさいこと繪をよるはらりて  
いふ

よき勢いありたりし

彩色いふ死あり事あり是繪をよるはらりて  
人せ見およぶぬらりの山

のうらみいふいふのさいこと

韓子云客為齊王畫者問之對曰狗馬家難鬼魅家易狗馬人

所知也且暮猶前不類之故鬼魅在形者可類改易

文選云畫鬼魅易成好益狗馬難為好 三都賦注

後漢書云張衡傳畫工惡圖而大馬而好作鬼魅以實難形

而虛偽不窮也 箋ノ義曰也

祇任此繪のさいりの物よりありて

去らふを似たりていふ

いふとていふぬれたりしものさいりていふ

さいりていふぬれたりしものさいりていふ

さいりていふぬれたりしものさいりていふ

これより山のさいりていふ

さいりていふぬれたりしものさいりていふ

さいりていふぬれたりしものさいりていふ

さいりていふぬれたりしものさいりていふ

繪のさいりていふぬれたりしものさいりていふ

或抄云とていふぬれたりしものさいりていふ



とて分りし得事なりよのれ山のくもゆひのつらさ  
しるのぬと見たり交らるる山なり人まはたる橋  
ハ山の地歌なりゆしきあす

私云すいよつこひながるるくさくさつかりぬと  
初よりつらひるあつさゆきまゆれ

吳融畫山水歎 良工善得丹青理 瓶向茅茨畫山木 地角移  
來方寸間 天墀字在筆鋒裏 日不落 月長生 雲斤々 号木吟  
々 經截胡蝶飛 不云累 截桃花 法不成 一斤石 數株之松 遠又  
洗池又濃不出 門庭三五步 觀盡江山千萬里

うしれてめくこり

雅兼記云天永元年十二月九

一日仰返房しきして去給師

全思子公望也 公望

子深江より子廣言し公望公忠上りし深江公廣言よりいふの  
多しゆと去つたに又時屏風とく人其深江は是と凡て廣  
言とちてとやしじ廣言る者し深江の云ぬはけゆしり母  
の言てんやし廣言るなりしよ又けぬは淡又ふかや廣  
言るるんく又叶りれしよし深江の云是ハ公忠れ給は

人屏風の陰をくくはきてしよのしり者めしりて是と  
凡て其名ありし時の人深江をくけ道と知るしん  
全思ハ山とくしり十五重廣言ハ五重し  
今業是れ農漢をのそを此山とあしん

全思 公望 公忠

深江 廣言

全思のしり

公忠のしり

公望のしり

公望のしり

\* 日 是ハ人忠を基めしん人の初し

或抄公忠のしりてとて授と云字ハしり院も他も

~~~~~

~~~~~

~~~~~



中ぬか母とまうらうららぬま君をさるれか女のう人よそせきる人  
忠んつとねん人ふめてゆつらうと  
借夫婦必訊君不終也とらう 白氏文集云大行路註  
中ぬか母とまうらうららぬま君をさるれか女のう人よそせきる人

あはれし事 是は死し因縁を脱し

兼 前よふくよらひとつらふと申すゆゆとて神がまにしつを  
ちきりしとて川わく後し鳥及知しをうらなれとハサと  
守れ保あうらうら 保し 中ぬか母とまうらうららぬま君をさるれか女のう人よそせきる人

あはれし事 是は死し因縁を脱し

あはれし事 是は死し因縁を脱し

あはれし事 是は死し因縁を脱し

兼 前よふくよらひとつらふと申すゆゆとて神がまにしつを  
ちきりしとて川わく後し鳥及知しをうらなれとハサと  
守れ保あうらうら 保し 中ぬか母とまうらうららぬま君をさるれか女のう人よそせきる人

あはれし事 是は死し因縁を脱し

あはれし事 是は死し因縁を脱し

あはれし事 是は死し因縁を脱し





あはれうらひなり  
口にさかすも

は女のうらみもなるがうらみさうなるか嫉妬れ  
うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

此のうらみゆや

うらみの前れまうらみやうらみ

下福は侍一町と回すし今あるうらみうらみうらみうらみ  
うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

今はいはれうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

言もかたりとさういひも句うらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ



とらふとけしてゐたれつゝまゐらぬらんあんとし  
年月とらふらん 人つとらふらんまゐらぬらん

馬及のつれもらんす又人殺しあるらん時をたれすあま  
あひかりしひき 女云人の世をさうとれあやし

弁云ひひかたしあつこ云つこめちりきるたつこ又まを  
つとらふらんまゐらぬらん 夫と女とらふらんつとらふらん

あつこ云ひひかたしあつこ云つこめちりきるたつこ又まを  
つとらふらんまゐらぬらん 夫と女とらふらんつとらふらん

あつこ云ひひかたしあつこ云つこめちりきるたつこ又まを  
つとらふらんまゐらぬらん 夫と女とらふらんつとらふらん

あつこ云ひひかたしあつこ云つこめちりきるたつこ又まを  
つとらふらんまゐらぬらん 夫と女とらふらんつとらふらん

あつこ云ひひかたしあつこ云つこめちりきるたつこ又まを  
つとらふらんまゐらぬらん 夫と女とらふらんつとらふらん

あつこ云ひひかたしあつこ云つこめちりきるたつこ又まを  
つとらふらんまゐらぬらん 夫と女とらふらんつとらふらん

あつこ云ひひかたしあつこ云つこめちりきるたつこ又まを  
つとらふらんまゐらぬらん 夫と女とらふらんつとらふらん

あつこ云ひひかたしあつこ云つこめちりきるたつこ又まを  
つとらふらんまゐらぬらん 夫と女とらふらんつとらふらん

あつこ云ひひかたしあつこ云つこめちりきるたつこ又まを  
つとらふらんまゐらぬらん 夫と女とらふらんつとらふらん

あつこ云ひひかたしあつこ云つこめちりきるたつこ又まを  
つとらふらんまゐらぬらん 夫と女とらふらんつとらふらん

あつこ云ひひかたしあつこ云つこめちりきるたつこ又まを  
つとらふらんまゐらぬらん 夫と女とらふらんつとらふらん

あつこ云ひひかたしあつこ云つこめちりきるたつこ又まを  
つとらふらんまゐらぬらん 夫と女とらふらんつとらふらん

あつこ云ひひかたしあつこ云つこめちりきるたつこ又まを  
つとらふらんまゐらぬらん 夫と女とらふらんつとらふらん

請君屈指教 白氏文集

笑云上句をよとす此教ありトノ句をうらまひ

一事にうらまひとらふらん

えうううううう 女 今い女をうらまひとらふらん



物とすのりすくとりてりしり

さびるよりなるまき

是又女れ性してしきりて

まきよりりりりりりりりりり

うきうきとつちいりりりりりりりり

女れ返着して返つて返つて返つて

つらつらとやうやうとつらつらと

りりりりりりりりりりりりりり

いりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

いりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

いりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

いりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

賀茂除時奈十一月酉日先兼日小試樂調示なとまきり

賀茂除時奈十一月酉日先兼日小試樂調示なとまきり

賀茂除時奈十一月酉日先兼日小試樂調示なとまきり

賀茂除時奈十一月酉日先兼日小試樂調示なとまきり

賀茂除時奈十一月酉日先兼日小試樂調示なとまきり

賀茂除時奈十一月酉日先兼日小試樂調示なとまきり

賀茂除時奈十一月酉日先兼日小試樂調示なとまきり

賀茂除時奈十一月酉日先兼日小試樂調示なとまきり

賀茂除時奈十一月酉日先兼日小試樂調示なとまきり

賀茂除時奈十一月酉日先兼日小試樂調示なとまきり

賀茂除時奈十一月酉日先兼日小試樂調示なとまきり

賀茂除時奈十一月酉日先兼日小試樂調示なとまきり

賀茂除時奈十一月酉日先兼日小試樂調示なとまきり

賀茂除時奈十一月酉日先兼日小試樂調示なとまきり

賀茂除時奈十一月酉日先兼日小試樂調示なとまきり

賀茂除時奈十一月酉日先兼日小試樂調示なとまきり

賀茂除時奈十一月酉日先兼日小試樂調示なとまきり

賀茂除時奈十一月酉日先兼日小試樂調示なとまきり

賀茂除時奈十一月酉日先兼日小試樂調示なとまきり

中将をまつりめゆりてあん前ハ午日個年よりと  
十一月下旬日候時之祭也 江次第延引時於藏人勘日時  
延喜七年下旬穢有同月七日所 同八年久有穢十二月二  
日亥日被行之ヲ

幾云宇多代御代の事始ては幾もろ物此物候ハ之代の事  
ゆいお候は我らるるをこ候は延喜四年十一月廿二日因雨雪看深  
履と山抄は物候よいつうろこれ路也といふ可あや難

賀茂原時条

試樂ハ前廿日より 調未ハ先二日 江次第我之

出御儀

出御清涼殿御引直衣御草鞋着御々倚子公踞着菅田座簀  
黍儀長橋座殿上人長橋二行敷置衆人陪從衆集樂所陪從  
衆進發物簀一衆二人進入露臺衆八拍子次他衆人木次衆  
相分進之駿河衆早自上退到竹臺下祖右進御前衆末五如  
前畢退

い〜くみ〜さ〜あ〜り〜也 昇 亥夜此儀候儀より〜

こ〜さ〜し〜人〜〜〜り〜何〜り〜 之代人候字あり

礼記

念ん

分教領別ハ雲 あり〜儀(行)也

或云何〜ハ退おし〜

或書別変し〜ハ文字傳て候きれ一劫如此

礼記より〜ん〜

いはる〜り〜ハ西悲ひ〜り〜

ふれ時心あおれと抄体まん〜ハは指喰〜花〜り〜

定〜る〜人〜あ〜れ〜ん〜り

私家ら〜ハ家系〜云〜し〜定〜る〜書〜し

ま〜あ〜り〜り〜何〜 何〜い〜ま〜さ〜か〜き〜し〜又〜あ〜る〜も〜儀〜

是下〜命〜して授命を其又〜り〜り〜と〜あ〜る〜と〜あ〜り〜て〜ま〜

け〜り〜物〜は〜ま〜こ〜さ〜り〜き〜か〜但〜又〜あ〜り〜ま〜ん〜を〜物〜人〜

ら〜り〜日〜ら〜れ〜ぬ〜ひ〜ね 内裏し

字〜ま〜を〜あ〜る〜あ〜〜り〜ハ〜路〜さ〜し〜り

花〜ハ〜字〜ま〜を〜あ〜る〜あ〜〜り〜ハ〜路〜さ〜し〜り

〜り〜〜女〜れ〜半〜と〜は〜け〜あ〜る〜

〜り〜〜女〜れ〜半〜と〜は〜け〜あ〜る〜





あゝめめしてゐる奴れんをあゝとめよとてし  
ららゝゝえさひひたるわ  
\* ちうに女れとてはたさ  
さんれんを馬ね、四代ありぬらんともいふわ  
つるあまを

真入

と馬れつけとまひきとる神し

川もせはるゝたそよとて喜物れつるひさしとるまゝとら  
ほよけ青いなる花つるひくひの痛ぬれん  
\* 女ととらゝゝさんとて喜物れつるひさしとらつ

あゝめめしてゐる奴れんをあゝとめよとてし  
ららゝゝえさひひたるわ  
\* ちうに女れとてはたさ  
さんれんを馬ね、四代ありぬらんともいふわ  
つるあまを  
と馬れつけとまひきとる神し  
川もせはるゝたそよとて喜物れつるひさしとるまゝとら  
ほよけ青いなる花つるひくひの痛ぬれん  
\* 女ととらゝゝさんとて喜物れつるひさしとらつ  
あゝめめしてゐる奴れんをあゝとめよとてし  
ららゝゝえさひひたるわ  
\* ちうに女れとてはたさ  
さんれんを馬ね、四代ありぬらんともいふわ  
つるあまを  
と馬れつけとまひきとる神し  
川もせはるゝたそよとて喜物れつるひさしとるまゝとら  
ほよけ青いなる花つるひくひの痛ぬれん  
\* 女ととらゝゝさんとて喜物れつるひさしとらつ

あゝめめしてゐる奴れんをあゝとめよとてし  
ららゝゝえさひひたるわ  
\* ちうに女れとてはたさ  
さんれんを馬ね、四代ありぬらんともいふわ  
つるあまを  
と馬れつけとまひきとる神し  
川もせはるゝたそよとて喜物れつるひさしとるまゝとら  
ほよけ青いなる花つるひくひの痛ぬれん  
\* 女ととらゝゝさんとて喜物れつるひさしとらつ

あゝめめしてゐる奴れんをあゝとめよとてし  
ららゝゝえさひひたるわ  
\* ちうに女れとてはたさ  
さんれんを馬ね、四代ありぬらんともいふわ  
つるあまを  
と馬れつけとまひきとる神し  
川もせはるゝたそよとて喜物れつるひさしとるまゝとら  
ほよけ青いなる花つるひくひの痛ぬれん  
\* 女ととらゝゝさんとて喜物れつるひさしとらつ

あゝめめしてゐる奴れんをあゝとめよとてし  
ららゝゝえさひひたるわ  
\* ちうに女れとてはたさ  
さんれんを馬ね、四代ありぬらんともいふわ  
つるあまを  
と馬れつけとまひきとる神し  
川もせはるゝたそよとて喜物れつるひさしとるまゝとら  
ほよけ青いなる花つるひくひの痛ぬれん  
\* 女ととらゝゝさんとて喜物れつるひさしとらつ

あゝめめしてゐる奴れんをあゝとめよとてし  
ららゝゝえさひひたるわ  
\* ちうに女れとてはたさ  
さんれんを馬ね、四代ありぬらんともいふわ  
つるあまを  
と馬れつけとまひきとる神し  
川もせはるゝたそよとて喜物れつるひさしとるまゝとら  
ほよけ青いなる花つるひくひの痛ぬれん  
\* 女ととらゝゝさんとて喜物れつるひさしとらつ

昔と傳ふ神としひ秋の終山の旅しりておころそし紅葉を  
極むるあり秋と傳ふ神とさし又たは神の名し但まれば終山  
娘れあす葉よるを採れ青子 ころゆきの七百にさる竜田飛  
を免これと風よりひる 秋のさむ娘を不見れ

七夕れもはと

物れさちぬのりたり

<sup>花</sup>あふし七夕つめ子却くくそもちぬあはれさあ人をまをる  
董永後漢人家貧傭力父死祀主人貨錢一萬以道遇一婦人  
求為永妻与俱詣主人令織簾三百疋葬以償一月而早辞永  
而去乃曰我天之織女也保君至孝天帝令我助君償債言記  
凌雲而去

私云 継事にあはれとてまをさるくつた哉とるし

うれささ  
并はらうさくさくそくうりつまき考れうらふたとまはらう人  
武苑あつしとたもそぬれむよとらわつしとさうは  
必書さうりつまきつ伊勢物語よさうらうさくといひ  
とてうらたといひのし 祇臣さうらうさくといひとまらうし

\* 何門本にうらやとるほはぬぐうらうさくといひ

私書と表紙にうらうさくといひ物れけうらうさく伊勢物語の  
武苑あつしとたもそぬれむよとらわつしとさうは

七夕れさちぬのりたり  
身十屋中おの初しのまあくさあちぬことかなはらうはち  
うらうぬあつしとたもそぬれむよとらわつしとさうは  
あはれささといひあつしとたもそぬれむよとらわつしとさうは  
すうらぬあつしとたもそぬれむよとらわつしとさうは  
とてあつしとたもそぬれむよとらわつしとさうは  
まにその終山娘れうらうさくといひとまらうし

きつ物ありしといふは書れ物のみあひくさくさくま  
あつしとたもそぬれむよとらわつしとさうは  
あつしとたもそぬれむよとらわつしとさうは

あつむり花多ノ伝きつらんくは

ちよき花のしほ

本歌花社の紅葉の造化のたふさく

とくにうきを花もまたくはあまのあつむり花のしほ  
かたののまうして人のさうくあつむり花のしほあひあき  
花とけ女れち初かりうかおひくくる花のしほあき  
を花多にあらはれをあひくくる花のしほあき  
まのしほくくる花のしほあき

或抄神託の紅葉のしほあき  
あきこまうきをきくくくる花のしほあき  
あきこまうきをきくくくる花のしほあき

後光 業 夕業 無見 日本紀

あきこまうきをきくくくる花のしほあき  
あきこまうきをきくくくる花のしほあき  
あきこまうきをきくくくる花のしほあき

あきこまうきをきくくくる花のしほあき

あきこまうきをきくくくる花のしほあき

あきこまうきをきくくくる花のしほあき  
あきこまうきをきくくくる花のしほあき  
あきこまうきをきくくくる花のしほあき

あきこまうきをきくくくる花のしほあき

あきこまうきをきくくくる花のしほあき  
あきこまうきをきくくくる花のしほあき  
あきこまうきをきくくくる花のしほあき

あきこまうきをきくくくる花のしほあき  
あきこまうきをきくくくる花のしほあき  
あきこまうきをきくくくる花のしほあき

あきこまうきをきくくくる花のしほあき  
あきこまうきをきくくくる花のしほあき  
あきこまうきをきくくくる花のしほあき

か人をあつらひし女として申後多しと

これんうをそのち 拾らひし女

まんくゆらうなるたの 本枯れし人細しゆし

白麩し 敷きよさのちあまうしゆし

えんよこれ申しきし 本枯れ風流好むれり細し

そつちのちあつらぬあしをねよりそらうのひらに

つまじよがらひしこころに又ふりひくそをきし

其まこととあつらひのち

あつらひ人まあひひ 本枯れ人ねもみねなるたの傍輩

かりんー内妻より 還あしよ由よ回車きくし常じん

のそきやといふ人とききそとをあつらひ

大物をれあつらひ 本枯れ人ねもみねなるたの傍輩

あつらひかりんー品大物をとつらかりんーあつらひ

何なるたの父もやとさてもあつらひいねるたよ嫁もか

私をぬえれやまもあつらひ父かりんーとあつらひ

かりんーのあよとあつらひしきたよ本枯れ女のあつらひ

あつらひれ原上人の本枯れ女よふもあつらひ

こころ人申らん月をあし 井後原上人女を娶りたる

月面白きあつらひかきとさうにのあつらひは女も

これ女のあつらひ 本枯れ女のあつらひ

あつらひる 大物をれあつらひし家とてあつらひ

ほつ風をあつらひつら物あつらひけり

あつらひあつらひあつらひと 本枯れ女のあつらひ

あつらひあつらひあつらひ 本枯れ女のあつらひ

拾遺は池より月のあつらひと強る 伊勢

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

水鏡と云初奇をたに面白くあつらひの遠近院以下池の水と白と

切くあつらひして月あつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ





式抄爰と後より神々あすすく包と色しこ此爰の心  
きりうふあひひり  
律れきり人の女忠  
花多并の律れ并し只の双調律の平調

女律の秋とつとさよふ又律の陰をれぬれ事し時良無律月  
カレの朝よあつらし 爰昇ふ日と  
物産つらふ 或抄律記のつらぬれきり人の女れとさ切く  
もあやううにとあそくほしこ

とのうらり 簾中し  
いづれまきころもの朝 并ち和云なれ今つたら物と  
又爰後と昔より傳へる事ハうらうらに  
ほしきま妙をいつてくまゆし

爰云加取の日記れ多るに唐れまの和合をりしとのうら  
唐れまに合奏もくさしめいぬりといふ  
女只日本もて傳へる物なれ今免くといふこと  
つとあひと 古今雜詠のあまふ阿つんつまれなれぬ  
りといふあひのあまふりちれ事とつとあひといふうらう月れ

あまきろき東がれはほりあまのこつとあひのつとあまし  
めつて 感情 といふ日本丸

とのうらり 簾中し 爰云是はうらうらに

あまの簾の中をさきえんのうらうらに

庭のあまをさきとあまのあまをさきとあまをさきと

日秋をさきぬあまを宿ふありしきぬあまをさきとあまをさきと

あまをさきとあまをさきとあまをさきとあまをさきと

けあまのあまをさきとあまをさきとあまをさきと

庭のあまをさきとあまをさきとあまをさきと

あまをさきとあまをさきとあまをさきと

あまをさきとあまをさきとあまをさきと

あまをさきとあまをさきとあまをさきと

あまをさきとあまをさきとあまをさきと

あまをさきとあまをさきとあまをさきと

あまをさきとあまをさきとあまをさきと

看上人女

ふやうにうり物とゆふよけんをえたり

祇住弄等两三度此書小一曰は此書と申す

この初月もえたりこの宿ありついでまき人と川やあらる

此書の本に兼てえりぬとて 報行本に六月し

祇住聖れきと月とさくひかりに宿ありは高き月を

人としえやとあさしとあつたつた物言とあつた毎れお葉

とて踏ちて見んやとされとつるれは初まきとあつた

月と兼てあつたあつたつたつたつたつたつたつたつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

此書はあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

今一丁とまきとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

此書

女  
糸の糸の別は俗人多くしとあると云ふ事建ちまへをいふ  
うへ人はあるして家も多敷ありは別れに事するの事と云ふ  
私云三つ句は別れ多敷本指は吹の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
祇作子界と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

圖書云一の紫より高量此の事と云ふ事と云ふ事  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
け女うへ人ふ事と云ふ事

つれつれ  
凡俗通曰秦也或云蒙恬所造五絃築也  
并吹列箏形如琴不知故 或云秦多善箏者故曰秦也秋名

箏施経高箏々然や 或物云漢秦帝使秦女數十絃琴色悲  
帝禁不得破琴為二十五絃一大三尺秦始皇時破二十五絃  
為十三絃今之箏是也昔以竹造之其後以桐造之也

いんしき 調 盤渉調 美云前之和調子ハ平調ナリ

今を初月あれは由調子と引し平調と盤渉とハ昔は律を甲し色  
つれつれ

調されうらめしき思れうらめしきと云ふ事

いざささのれ 後へゆくか 藤かり

まはるまき やのまき 竹う事と云ふ事と云ふ事

和歌と引きまのしと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

言はまらしと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

私をまの初と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
ふれまきと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

世と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
其れ

そとまきと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
其れ

と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
其れ

と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
其れ

そとまきと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
其れ

そとまきと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
其れ

かゝるもあやむしといふ人なりぬるまじし  
その由れしにあらうてこそ

あま今本松尾奇後  
つりゆむの時のし前よとけ女とてなれこのまじき  
わあつめおろしう風流さうさといふりあもはそめ  
折しむるまじとてなけて中後さうさし

けさの事と  
本松尾女と松尾ひし女と  
つらあはさう  
る後今よりわたり可しけし

りてつそめ  
まうし女れさめし  
指倉の女よしくもむおち松の女のむもつとてし

いふものら  
るなれむと年れよる程さうなれ  
らあろ女いつやとおのあなまし

ゆられまじ  
るなつ原と中ぬとさうさし  
そしてあめとき松の病初つて信あんとてあま上  
はあて思てあまを去ぬまは松松松松とてあまおれ

つらにうやうういんおんこはとわ是のあまは  
紙に松れ松あまを松は海川多とさうさうたあま

事し品の小のりくやうさうし  
んをまのりは松尾のせんとの由し

毎  
松尾中ぬるとれ信のまじあううやれあまらう  
しそまうやう松尾し川奇は不及品あまのう松尾

弄  
川奇まももろろいんあまあまあま  
ま信の約しときあまらん女あま

あえりあ  
はち松尾らんらんくひつらよりの松  
いふさうさうさうさうせあまらりりりり

孟子曰七年之病求三年之艾又椽樟七年とてさうのま  
七年にたれは松尾まを儒をれあまはあまらう

此事つらうさうさうさうし七し七し  
十六やまあまの今七しとてあまは松尾年れ松尾あまらう  
わあし知らんまはし

弄  
松尾あまはしとて年松尾とて松尾とて松尾とて  
あて向後と松尾異し  
松尾記

水原原より七のつらに先と云ぬれども只七の右教をあげ  
て今少くも一と云りてその初めよりありきと云し  
幾と云ふは豫章七年に事と引し又原氏十六歳に依  
て大なるぬれぬれをいふなりと云ふの事と云し  
一説又云ふは原氏十七歳に先と云説一たりと云  
字記云一年視離経辨志三年視政業宗群五年視傳習親師  
七年視論学取文謂之小成九年謂之大成  
又云云兵のれぬれと云ふの事より自然なる事と云ふは  
初

ときふめいん女

救事

梳

おまこまるひ

かきあつゝおぬしぬりあつゝはなはるゝぬい

あやこらゝとらん人の名を

ときぬりあつゝ女風流を

いぬる女あやこらゝとらん人のと云ふは女はらゝとらん  
自他れらゝいぬれらゝは男れらゝぬりとらん

いま一書

滅し

此理と種とを別あれと云く云極れり

中お建いのうらひく お 身十二身

及中將し帝すゝらひくと云ふはあは別のと云ふ  
君と云ふは い 君と云ふはあは別のと云ふ

ころころは い 君と云ふはあは別のと云ふ

いづゝゝゝ い 君と云ふはあは別のと云ふ

おやあゝゝ い 君と云ふはあは別のと云ふ

なうゝゝ い 君と云ふはあは別のと云ふ

これものかといふとて い 君と云ふはあは別のと云ふ  
又た傳十三成五十八年之傳を専不并教支故不可定 傳

不惠世所謂自虐下と云は是 人忠貞疾力つるを善也と云  
さすはるの面也 如何と云ふはさうめくあか人の心

あつてはしき物と云は 祇住の事をいふ事なり  
るはわすれぬと云は 忘れぬ物なりはわすれぬ事なり

あつてはしき物と云は 祇住の事をいふ事なり  
るはわすれぬと云は 忘れぬ物なりはわすれぬ事なり

あつてはしき物と云は 祇住の事をいふ事なり  
るはわすれぬと云は 忘れぬ物なりはわすれぬ事なり

あつてはしき物と云は 祇住の事をいふ事なり  
るはわすれぬと云は 忘れぬ物なりはわすれぬ事なり

あつてはしき物と云は 祇住の事をいふ事なり  
るはわすれぬと云は 忘れぬ物なりはわすれぬ事なり

あつてはしき物と云は 祇住の事をいふ事なり  
るはわすれぬと云は 忘れぬ物なりはわすれぬ事なり

あつてはしき物と云は 祇住の事をいふ事なり  
るはわすれぬと云は 忘れぬ物なりはわすれぬ事なり

あつてはしき物と云は 祇住の事をいふ事なり  
るはわすれぬと云は 忘れぬ物なりはわすれぬ事なり

あつてはしき物と云は 祇住の事をいふ事なり  
るはわすれぬと云は 忘れぬ物なりはわすれぬ事なり

あつてはしき物と云は 祇住の事をいふ事なり  
るはわすれぬと云は 忘れぬ物なりはわすれぬ事なり

あつてはしき物と云は 祇住の事をいふ事なり  
るはわすれぬと云は 忘れぬ物なりはわすれぬ事なり

あつてはしき物と云は 祇住の事をいふ事なり  
るはわすれぬと云は 忘れぬ物なりはわすれぬ事なり

あつてはしき物と云は 祇住の事をいふ事なり  
るはわすれぬと云は 忘れぬ物なりはわすれぬ事なり

あつてはしき物と云は 祇住の事をいふ事なり  
るはわすれぬと云は 忘れぬ物なりはわすれぬ事なり

つれづれのつれづれに  
夕魚上れつと中おのゝあしとて  
おとよきこゝろの  
おろしれ尚幼のつれづれ

後くも多り  
中おの後くもて語らるる体をもいふは  
さそよのみのつれづれ  
中おの後くもて語らるる体をもいふは

いと下とかなつてなつてまじ  
おとよきこゝろの  
後くも多り  
中おの後くもて語らるる体をもいふは

優なる初しとつてこれのつれづれのつれづれ  
まらり相つて後つておのつれづれ  
いなりとつて又かなつてまじ  
おとよきこゝろの

つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ

夕魚上  
山里  
夕魚上  
山里  
夕魚上  
山里

つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれ







そらうくもと物ありあつて

これあんなえりてあつて  
えんあつてなまきつらりて  
あはれるなり

これハ彼さうまの  
花十四能中おれり

けりまらふ物ありて  
如し聖えききあきんハ  
おれり

是より又るなり  
如し花ハ中將の如し

或抄頌もさき  
鳥及如とあり

花十四能も  
如し花ハ中將の如し

三種の如し  
一交とあり

おのひおくあり  
如し

あつてしを  
おれり

くはるる  
あり

これあつて  
あり

本指れ  
あり

けりし  
あり

めこ  
あり

世中  
あり

世中  
あり

これあつて  
あり

くはるる  
あり

なん  
あり

可  
あり

天女  
あり

けり  
あり

瑠璃金山宝  
祀光照吉祥切  
能海如来  
最勝王  
住大言  
吉祥天女

有数城有固  
其名曰妙花  
福光  
蓄在教  
鑊七宝  
宮殿宝六  
珠其

中在天女名  
摩訶室利  
提优月  
額回  
也秋空  
排雲花  
姿妙艷

也春林增  
白五色  
雲上馬  
兜宝  
瓶出珍  
宝千葉  
宝蓋  
妙樂諸天

作供養  
九千捧  
如意珠  
隨願  
兩戴  
宝右掌  
千印  
施无畏  
任願休

怖畏或  
歡喜地  
菩薩  
鎮生如  
来家或  
不動地  
產極  
妙道无  
相門



方略此宣旨と参りて式部有りと課法を内して入るれ  
の中にもあつて思ふに時博士と奉りて大名家を以てこ  
進とつらむる吏記と改めたる及中して擬文章<sup>ナシ</sup>の補  
欠人此人或部有りと又試とて内侍と化す及此  
人外之者に補を是とを士と云式部前よりあつて勅  
とつてつらむる或は文章生に補を此後さうに方略  
宣旨と参りて課法とてくを例にこれをを士の時替  
多りといふ方畧宣旨とつて御進つる方畧此試とて  
文章生方畧此宣旨と参りて試案此例とて内職此例  
とて外此例とて敬位此例とて文章生文とて好業  
とて内此例とて課法の例を是とて文章生とて御進  
つて方畧此試とて及此例とて

此段於し女史とて

あつてこれ中に

及式部、例

はつてつらむる

花中十六段式部例

ね云つたこれ中に

とてあつてつらむる

まこと文章生に

是より及式部、物法

及式部、つらむる

物法、つらむる

はつてつらむる

花中、つらむる

とてあつてつらむる

馬、つらむる

はつてつらむる

女史、例

ね云つたこれ

はつてつらむる

博士、つらむる

とてあつてつらむる

文章、つらむる

時師、つらむる

新しきもの

水やきつりて

式部、師直此ころ也

家、元の内々をまけし

後式部此ころ先の也

父忠くもこれ怪ひくころと申すも、補し二ノ道、文集ノ

表、申あつて、つて、情、士、子、似、る、ら、る、も、申、入、下、是、を、我、也

家、秘、家、秘、乃、礼、と、つ、つ、女、侍、入、口、下、あ、ま、る、る、也

西道 富家ノ女、性、其、父、貧、家ノ女、孝、於、姑、ト云、四、ノ、家、ニ、云、家、シ、也

在 我、二、の、乃、く、つ、つ、と、ま、け、と、白、樂、天、れ、秦、中、吟、れ、中、の、全、句、し

二、乃、と、云、云、貧、家、れ、女、と、富、家、れ、女、と、の、均、夫、と、傷、を、り、し、と、云、る

家、れ、女、嫁、け、る、の、事、ハ、不、足、也、ぬ、ま、に、申、す、事、ゆ、け、り、

後、よ、い、ま、ま、と、い、ふ、ん、と、い、ふ、物、し、ま、し、き、家、れ、女、婚、れ、た、と、

き、と、い、ふ、つ、れ、あ、る、と、い、ふ、事、如、何、と、い、ふ、の、志、と、い、ふ、あ、ら、と、い、

存、と、い、ふ、は、是、ハ、情、士、れ、女、貧、家、か、つ、た、と、い、ふ、式、部、に、い、

ま、と、い、ふ、中、の、し、ら、り、と、い、ふ、と、い、ふ、也

天下無正色

悦年、即為娼

人間無正色

悦月、即為姝

規、色、非、相、遠

貧富則有殊

貧為時所弃

富為時所趨

杠、樓、富、家、女

金、縷、繡、羅、襪

見、人、不、歛、手

嬌、羞、二、ハ、初

母、兄、米、用、口

已、嫁、不、頂、史

縁、忘、貧、家、女

寔、寔、二、十、餘

前、叙、不、宜、錢

衣、上、無、真、珠

貧、困、人、欲、娖

臨、目、又、臨、跗

主、人、會、良、媒

置、酒、滿、玉、臺

四、座、且、勿、飲

德、我、欲、兩、逢

富、家、女、易、嫁

富、早、輕、其、夫

貧、家、女、難、嫁

嫁、晚、孝、於、姑

因、君、欲、娶、婦

欲、要、意、如、何

治、し、ホトトシ

彼、お、ん、れ、ん、と、い、つ、て

け、女、式、部、の、つ、り、あ、ら、ぬ、し

け、女、れ、父、情、士、ハ、式、部、ノ、師、と、い、は、れ、り、と、い、ふ、也

け、女、れ、式、部、ノ、事、と、い、ふ、は、今、ノ、後、見、て

け、女、れ、式、部、ノ、事、と、い、ふ、也

け、女、れ、式、部、ノ、事、と、い、ふ、也

け、女、れ、式、部、ノ、事、と、い、ふ、也

け、女、れ、式、部、ノ、事、と、い、ふ、也

け、女、れ、式、部、ノ、事、と、い、ふ、也

け、女、れ、式、部、ノ、事、と、い、ふ、也



しにあのひめをたより  
あつたつたや  
昔れ人の神とつていつてかこりぬ

とまわつてまをれれ久きつとつぬあふたにあのひ  
らつて或知れつとつた

ふたあつたり  
是二式神のまはつぬあつて是を  
つこはけあつて中後まよたつとつた

此のり人  
情まれあつて是をまはつとつた  
賢ノ字のまはつとつた

女云其人の形か  
女のをつとつた  
女のをつとつた

つる根  
つる根のまはつとつた  
つる根のまはつとつた

是の根  
是の根のまはつとつた  
是の根のまはつとつた

月はあつた  
月はあつた  
月はあつた

又私抄  
又私抄の風病  
又私抄の風病

極熱  
極熱のまはつとつた  
極熱のまはつとつた

今種  
今種のまはつとつた  
今種のまはつとつた

何故  
何故のまはつとつた  
何故のまはつとつた

何故  
何故のまはつとつた  
何故のまはつとつた

何故  
何故のまはつとつた  
何故のまはつとつた

何故  
何故のまはつとつた  
何故のまはつとつた



★ 土用はひらりと立て萬の月々申れり  
此段皆粗言あつたり

中れあつたり形も  
又親ノ家と師のあつたりと修り

ひら〜きく  
新子あつ

〜〜〜  
或は或郷のつと取議〜〜〜人の知

〜〜〜  
何〜〜〜

〜〜〜  
或は或郷のつと取議〜〜〜

〜〜〜  
或は或郷のつと取議〜〜〜

〜〜〜  
或は或郷のつと取議〜〜〜

〜〜〜  
或は或郷のつと取議〜〜〜

〜〜〜  
或は或郷のつと取議〜〜〜

〜〜〜  
或は或郷のつと取議〜〜〜

〜〜〜  
或は或郷のつと取議〜〜〜

〜〜〜  
或は或郷のつと取議〜〜〜

〜〜〜  
或は或郷のつと取議〜〜〜

〜〜〜  
或は或郷のつと取議〜〜〜

〜〜〜  
或は或郷のつと取議〜〜〜



おのりおとし... 三史女経の... 五経ハ 毛詩 禮記 春秋 周易 尚書 伊行教ニ三史五経之序と

りきて三史ハ紀傳明証明法とス... 又一匠ハ業式アリ...

礼 女は... 業式アリ...

それともあれ... 女は... 業式アリ...

弄 女は...

その... 女は... 業式アリ...

その... 女は... 業式アリ...

その... 女は... 業式アリ...

その... 女は... 業式アリ...

らるるん人とおいひつらしきもつ人のきこつらるる

其名と云物を可れ居りつらがる事とあるに彼をせしこつら  
やうひかり

私つらにそと華人のつらさふんぬ事をものりひにせし

こつらひひるり つらとめさふらつらつら

上らるれかひ 弄弄後つまひを人かひ

弄弄をせわらるる 弄後つまひを人かひ

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

私つらにそと華人のつらさふんぬ事をものりひにせし

こつらひひるり つらとめさふらつらつら

上らるれかひ 弄弄後つまひを人かひ

弄弄をせわらるる 弄後つまひを人かひ

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

つらとつら つらとつら

十二人先悲的廿将終飾馬出自馬出徒行不立一的十丈皆留次  
記る勝負馬諸丈夫俗酒群に祥乘車駕還宮雅樂奏樂

私云神監奏とハ大将神監とて九右将九右将九右大将九右大将  
と差成と又羽附とを集れおのり下れとてさるれとて又名又とて  
此事と奏せむとてさるれとてさるれとてさるれとてさるれとて  
是もて奏すの段は不可及然を幾も西交ノ景と川物入られ  
むらありきとてさるれとてさるれとてさるれとて

何れわわわとてさるれとてさるれとてさるれとて  
元 川わわのらわわわ

さるれとてさるれとてさるれとてさるれとて  
おのりてさるれとてさるれとてさるれとて

えのね福と川とて  
元 川わわのらわわわ

おのりてさるれとてさるれとてさるれとて  
さるれとてさるれとてさるれとてさるれとて

おのりてさるれとてさるれとてさるれとて  
さるれとてさるれとてさるれとてさるれとて

えのね福と川とて  
元 川わわのらわわわ

九月九日  
何九月安月令重陽日兼有菖花天数九秋

教九仍曰重陽見周易 漬齋諧記云桓榮家九月九日當途

大災可蓋家貴長房云登高節採茱萸挿頭折菊蕊浮酒將獲  
此是桓榮暮而歸家內獲大牛馬皆死長房以之曰女無災

平城天皇四年九月九日幸神泉苑菊余文人賦詩賜物有元  
寬平遺誠曰五月五日九日文人武士行笈繁不可忘不後

重陽之宴  
天皇内殿子出所ありて内弁弁有文人

博士とのまはて吾讀ノ字とてさるれとて  
さるれとてさるれとてさるれとて

河内平陽殿とて平座とて上つ下とてさるれとて  
菊の葉を水魚とてさるれとて

江波とて此後之後於重陽殿有平座 西宮勅物云原平

元 川わわのらわわわ  
代 忘月ノ





あやしきと世に人の事終き世のさゝい  
からしきつと見れまはしきとさわり

おぼろしくしてゐれ暗るらむ

昇 森をれれらるるしとされし所也とある事  
日れしとまことさう 義曰と 叔又曰と

おぼろしくしてゐれ暗るらむ 義曰と 叔又曰と

祇はそいふれぬのゆゑに日とらしてとるぬれ  
暗るしはよやくとて暗るらむと曰く事し

たのしみとておぼろしくしてゐれ

おぼろしくしてゐれ又た長れ事し人なればは  
氏とつらしてとるはとてさひもつたし義曰と

人といふことと 奏上れ候のまこと此神し

義大といふは候しめきりしとまり

人なまらひと 奏上れ神し

さうやと 義大といふは候しめきりしとまり

彼人といふと 義大といふは候しめきりしとまり

義大といふは候しめきりしとまり

あまらひとて 義大といふは候しめきりしとまり

さうとて 義大といふは候しめきりしとまり

奏上れとて 義大といふは候しめきりしとまり

中納言長中務とて 義大といふは候しめきりしとまり

中納言長中務とて 義大といふは候しめきりしとまり

は氏とて 義大といふは候しめきりしとまり

いぬとて 義大といふは候しめきりしとまり

あつとて 義大といふは候しめきりしとまり

実とて 義大といふは候しめきりしとまり

おぼろしくしてゐれ暗るらむ

おぼろしくしてゐれ暗るらむ

あつとて 義大といふは候しめきりしとまり

あつとて 義大といふは候しめきりしとまり





ニ光中神と云ふ事ありし

内よりいふ事ありし 内裏より元來此里亭一の中神方なりし

いふ事ありし 花のりいふ事ありし

初しきいふ事ありし

二条院よりおありし 桐壺此文衣此里の亭し内裏より

九石花此亭一也ニ条院へも同方なりし

花のりいふ事ありし

いふ事ありし

并花のりいふ事ありし

陽成院とニ条院と号し 脱履の後巾は院ニ条以大炊師門以南

仲山宮以東西間以西 皇統此名跡を唯授る事廿一夏ありし

ニ条院陽成院は唯授せらるゆは海載せられし事ありし

と云ふ事ありし

此汁りしれりし事ありし

ありし事ありし

ありし事ありし

ありし事ありし

ありし事ありし

ありし事ありし

ありし事ありし

ありし事ありし

ありし事ありし

ありし事ありし

ありし事ありし

ありし事ありし

ありし事ありし

ありし事ありし

ありし事ありし

ありし事ありし

ありし事ありし



けしひのうらむのあやせきつきて未陰陽一も中られま  
つゝよろし 伊の初

なやまうききた 史中ノ思見たりとわ

伊れ勝氣しあやうらわすうきとまう

うらまう引入 伊方あう人ふよふらそ門より下草う

まのりそすねふまううア一毛一伊のあひのたれ下草う

一ひまう一まうあさふよのうら

思ひくれけけさううふ 伊股と伊の紀伊守のあ方置

もあつとひ逃るう思ひく伊の思ぬうふあまうまう

伊氏君養上れ伊里一程うううううううううううううう

伊あまう人すうおくそくして紀伊守の中れあまう人あ

伊氏れあひのうまよふあううううううううううううう

れあまういあまうえあまうあまうあまうあまうあまう

てあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまう

つひあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまう

紀伊守に事しあまう人あ 今東あまう人ま命とけうあ

うけあまううあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまう

いよのうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまう

伊れあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまう

伊れあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまう

あまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまう

あまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまう

あまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまう

あまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまう

あまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまう

あまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまう

あまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまう

あまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまう

あまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまう

あまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまう

あまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまうあまう

席 日本紀伊座 日遊 史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

再 史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席

史記云衛叔封布宣 匡云在廣云茲者 廠席





はらきわよつてしひ  
いさよはつてつらかたしそは日霞庵のつられ母屋より西  
東へとぬかたれ長なるぬか

取詳 万葉

つらつらぬか  
はらきわよつてしひ

いさよはつてつらかたしそは日霞庵のつられ母屋より西

東へとぬかたれ長なるぬか

つらつらぬか

はらきわよつてしひ

いさよはつてつらかたしそは日霞庵のつられ母屋より西

東へとぬかたれ長なるぬか

つらつらぬか

はらきわよつてしひ

いさよはつてつらかたしそは日霞庵のつられ母屋より西

東へとぬかたれ長なるぬか

つらつらぬか

はらきわよつてしひ

いさよはつてつらかたしそは日霞庵のつられ母屋より西

東へとぬかたれ長なるぬか

つらつらぬか

はらきわよつてしひ

いさよはつてつらかたしそは日霞庵のつられ母屋より西

東へとぬかたれ長なるぬか

つらつらぬか

はらきわよつてしひ

いさよはつてつらかたしそは日霞庵のつられ母屋より西

東へとぬかたれ長なるぬか

つらつらぬか

はらきわよつてしひ

いさよはつてつらかたしそは日霞庵のつられ母屋より西

東へとぬかたれ長なるぬか

たれり対をら知し 紫明抄云あまのりかこし  
く月ろくと物のとまふるそとらこまをときとらあまをん  
とらうと女房のうまこれゆつわぬ申し

中云初の夕 式抄中祝極信は実かたつたまやよは  
まろこしこれの初てありつるまきけまきつる月ろくし

これよ月てつれ打ゆらん申さるしと云ひ  
源氏にまやもてとらとらてし 傳みそとらりふる極あし

そしと女房申さるまきとらなり  
又云莫傾徳と礼記の穢なれは強てらゆもなるまきとら

又莫言人之短と崔之あつまのなれは女房の傳のまを  
つらと申さるなれすとらとら

争つてあて 紀のちけあてあてし  
くもあつら 養服なつらつる物なつらつら

とらつらつらといふは 炊か

元多礼太留平於保支員子万無已余世无員心九可奈余子

可奈余子可无安彼比九多字加世与介无安彼比九多字加  
世与介无 催馬楽 吕我家 家家とりけとらとらんの曲とりつら

もあるれさうにきこもし源氏まれさつらつらつら  
とれつらかりきとらゆせむとんとつらとらとらつら

りれ家女ともれまとらとらてあつられまつらつら  
あつらとら養れ事し叔紀のちつらつらつらつらつら

ほとつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
ともえ悟をぬつらつらつらつらつらつらつらつらつら

ほつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
ほつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら



とらして山海を著してとゆふ人まはさうなりゆめえさき  
けさひのあつれ事と作らぬとさうおられまはさし  
しつとこれおき

長たれは海にまきくたに神はほれらるる神のあつれ  
あつれこれおき 義玄紀のまきくたにまきくたにまきくたに  
けてまきくたに神のあつれらるる神のあつれらるる神の  
れ神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる

こころなるあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる  
とまきくたに神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる  
一暮むしつ人の持理定まを或は地下或は天上にまきくたに  
其子れ童羅麻とまきくたに神のあつれらるる神のあつれらるる

伊文の子 義玄紀のまきくたに神のあつれらるる神のあつれらるる  
私云義人のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる  
伊文の子とまきくたに神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる  
年とめとまきくたに神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる  
あつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる

は 雑抄 日本紀

仙原云あつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる  
義云空塔れまきくたに神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる  
後ハたあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる  
神色あつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる

しつとつれ 義向はほれ紀のまきくたに神のあつれらるる神のあつれらるる  
こまは右のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる  
あつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる  
こまは右のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる

但義云あつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる  
とらくしつとつれ 義向はほれ紀のまきくたに神のあつれらるる神のあつれらるる  
親のまきくたに神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる  
らつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる

あつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる  
けあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる  
まきくたに神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる  
あつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる神のあつれらるる

＊ 後のおや 花継母たり

＊ さういふはるばるの紀のちれさうあつて申あきま

おけりおんわ 和合つぬあやしのね

うんすてまきさうのしよきそ 又存すたきれ何ゆへん

れつさうさうさうともししとやとあつて

＊ 父をまつて人よきせんしとせしはて内まはれさうし

あゆのまきよあつてあつてまきれしやと

しよんまきれまき 伊のおきやたのあつて

あつてあつて 紀の守初し不きし

白 不きし日記のしよあつてあつてあつてあつて

或はあつてあつてあつてあつてあつてあつて

世中しよあつてあつてあつてあつてあつてあつて

伊子かきしつや 伊の初

＊ 伊子かきしつや

君とさうらんが 伊子かきしつや

＊ 伊子かきしつや

いづれさうさうさうさうさうさうさうさうさう

＊ 伊子かきしつや

私のおきやあつてあつてあつてあつてあつて

＊ 伊子かきしつや

をさうさうさうさうさうさうさうさうさう

＊ 伊子かきしつや

おけりおんわ

＊ 伊子かきしつや

おけりおんわ

＊ 伊子かきしつや

＊ 伊子かきしつや

＊ 伊子かきしつや

＊ 伊子かきしつや

黄△△△  
杜牧  
五五五五

\* 紀ノ守ヲ初シ志ノバハ新令シ  
名ヤ初メシ作ルル時トシテ  
つ連テ初メテおぬこし人の家ニひあてて是を  
あひまゝに  
海ノ神供の人ニ  
まのこにありて  
妻の東隣て  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ

あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ

あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ

あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ

あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ

あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ

沖茶ノり初ルルも少少ノり

あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ

あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ

あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ

あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ

あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ

あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ

あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ

あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ

あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ  
あはれはつたふあはれはつたふ

初めありしつゝふ  
いづれに運つゝと念と  
存しつゝとめく

うつせしれ約  
源れしちり史ありて  
つゝとていほ引かき  
是より及し

祀  
是ハ源氏れ君れ立  
初はなまれまけし  
つゝとていほ引かき  
是より及し

中務の君を  
は夕長妻お物と

小君し丸し

女君を  
うつせし降子と  
つゝとていほ引かき  
是より及し

今此此の源氏  
つゝとていほ引かき  
是より及し

此の源氏  
つゝとていほ引かき  
是より及し

此の源氏  
つゝとていほ引かき  
是より及し

此の源氏  
つゝとていほ引かき  
是より及し

此の源氏  
つゝとていほ引かき  
是より及し

此の源氏  
つゝとていほ引かき  
是より及し

此の源氏  
つゝとていほ引かき  
是より及し

此の源氏  
つゝとていほ引かき  
是より及し

此の源氏  
つゝとていほ引かき  
是より及し

此の源氏  
つゝとていほ引かき  
是より及し

うわつそ 細々許 世伝石 夜し 小唄

いしつちりさたつ

まねとやるそ 海の家船のまねとやるし

わしめつるん づきれ海女とあな中おこそわ

中将うつ道いあん 是より船屋の海女あ初し

原氏君は時中おのまを居る中おなれは馬車は由宣を

女 後 十月と 祇園原氏君をさすのうらきつ中おうら

あそと女房とつを中おのり家津舟は友中おそた

し中おせはれとよのけをよとらあそのもろし

人きつあそのもろし 海女船屋とよのけ

ついよひさよねんあそひのし中おあのあ

してあしあふいせあそとあ人あ初し

あつとあふいせあそとあ人あ初し

わとあふいせあそとあ人あ初し

うらつあふいせあそとあ人あ初し

れきつあふいせあそとあ人あ初し

うらつあふいせあそとあ人あ初し

うらつあふいせあそとあ人あ初し

うらつあふいせあそとあ人あ初し

うらつあふいせあそとあ人あ初し

うらつあふいせあそとあ人あ初し

うらつあふいせあそとあ人あ初し

うらつあふいせあそとあ人あ初し

うらつあふいせあそとあ人あ初し

うらつあふいせあそとあ人あ初し

うらつあふいせあそとあ人あ初し

うらつあふいせあそとあ人あ初し

うらつあふいせあそとあ人あ初し

うらつあふいせあそとあ人あ初し

うらつあふいせあそとあ人あ初し



うすあしぬあつし

何程れ初し 筆秘如此

私云程し何さましきにうらちあつしと云ふ

あつし程し初し

いづくいさあつしん ちあつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

あつし程し初し

うきをれをぬれらうとてきたと想て乃胆をけてせれんを  
あつる聲のあつりひのうきんと海のうき  
いぬいのたれけりまをぬれ 宿願のらん海をぬれ

乃胆をけておそき業のこゝせれつるをうきうきと想との上  
よそいせよぬらひなき海ゆきぬかたにやうにあらうれ  
て文紙の書あをたぬらぬ身もそはしくするひんこ  
まきうきまきとめと早下してうらぶく共恨あられ

うらぶあき物あは海のちひもあひつてさうんと又  
さのふきし娘のま理あそしうらぬつとつとさひうひ  
りすまそ又海のらんわうたさひひまうう身と早下  
してさひうきあふまらきて貞女れ世をぬら

さふえれつらひひあれそ 恨ちぬれと海のさうぬん  
せれも自らをさましよりぬさひまぬと海  
さうれまのんうらうらうぬ事と二文よさう  
人しれぬと海さあまに 是より宿願の体又うきひん  
かきまぬけれらうとて 川舟二首を一首畧し

川舟二首を一首畧し

あかしのけのうらうたう人は初初れあきめを物とさあはれ

かきまぬけらうとてこれ行しうきうきとさうとさうわ  
うらうきまぬけれぬぬぬぬ 私云け舟に及ぬ  
幾云染者勝強とさう 女わいさうさけぬをさう  
んらうらうらあまを 女わいさうさけぬをさう

あつとつらうとさうさうき物うらうと 海の初し  
おろくされさあうらうしとさう 女不され美なうた  
一匠うらうさあうれ 周縁しとれとこ

せとあひのさうぬあうらうありれまうらうん  
幾世もさぬ人の極よさひまのむつる曲あ一葉がさ  
あられしてせふたれぬらうにぬらうと娘美ゆき  
うらうらうらうと 海うらうつさう恨さうとこ

いとうらうきぬれあうらうさうさうぬ うちさうれん布し  
伊ふぬ、書うらうあてにさうさうとこ  
あつらうあうらうれあうた け奥入さうらうさあうらう





かしてワカレと推考していつとえやられけ義三郎変し  
と流るる人衆りありさあめ好め申おありとらん  
此夜更のすゝみやるやれを促くを但し時いあひゆるり  
初れて足しとら一乗くむさうとささるひても甚接つてあ  
て加えわろくす貞良もろくやけ美用と  
夜更を驚く懸あめつる多う早くと云られたけ時海をさす如  
ぬえ美し義揮勢海とけり野とハ源氏一那れ貞女たれは実  
凡みしと云、是後と那くハされし物は後土中門院辞  
申會意と云よけつと所一照つ物とてひいさなるれ  
めや又うたれておりや一時ハうろろあし物とされもさう  
まろハそれと申されなれりとうるやられなる  
ちとかりさぬ 句のつとさおりのろくさるや  
いさこめつとさう衣なる おうらぬゆるあふとし  
心つとれんこつと移ゆる移ゆるのこまこがたれ人の称こま  
くろりはくく寝られもろとつと  
中車初まつとらん 源氏車しり供の人れりて

つとらつとまを

紀のちしは供れ能とまらひり

女中の御方とらん

紀多初源氏中御を移す

義三とそととまきうりあう又上ノ段かたおめさるまきん  
しおかりけは、そ見えの向

おと女たりの御方遣しと束うつとさる好も何そ是ハ  
夜よりつとさるやまうまきとさしひいあしとらん

君ハ又もつとらん

源のつと

つとらつとらん

おつとらつとらん

夜更の御方とまらちうらんれなれりし又懸とつとらん  
おれ中かた

けし入る物とつとらん

いそつとらゆへま 圖書みあしつとらん

らんめやとあし

らんきぬゆつとらん

おらんよつとらん

あはれさへ 又原のつよは切よそつうし  
めつうするゆゑ

ほろろと一から中とかわるまじりやんあはれは初

かゆめあきやう 後の種 せん媚女高をよまう

おしあはれは初め女のかゆめさうあはれは初

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

救世阿彌のたのびつうしつうしつうし 周章 マツタヒ

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

あはれさへしつうしつうしつうしつうし

箋云 ぬれし紙と致さしむし紙とゆわく事あり  
さうりし紙と致さしむし紙とゆわく事あり  
紙と致さしむし紙とゆわく事あり  
紙と致さしむし紙とゆわく事あり

私云 箋ノ箋字ナリ紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

我と紙の紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ

紙ノ紙字ニ紙字ナリ



二重庵より... 後日

ふき... 伊の守様とさひやうのま

ふき... 前六右衛門書と云ふよ... 伊の守様とさひやうのま

うん... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

むの... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

あは... 伊の守様とさひやうのま

されしつゝ  
あおふもたれもほれもくつみたる  
あつらひつゝつをくの中しつらまをんもあふるやにほまふ  
うほこしそ 白紙と原とふもとりつらひつゝあつ

あつらひつゝも  
小君のさむし  
あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

あつらひつゝも  
小君のさむし

つておよんきき  
さかみあつたひえ  
めいよふつそふ

中略の初めより  
こころあつたひえ  
小君の初め

海にまじりあつた  
君やーとせ

海の小君を  
海にまじりあつた

くまらあめ  
うつとれま

小君の神し  
海の小君を

きくこ  
いづのまのし

小君の神し  
海の小君を

まらまら  
あこハキし

源氏を  
書子 日本紀

\*小君と

源氏を  
書子 日本紀

そのいふ  
お云ふ  
こころ

おれりけり  
先は  
ひん  
うら  
むつ  
家と  
\*  
子  
の  
ま  
あ  
あ

おれりけり  
先は  
ひん  
うら  
むつ  
家と  
\*  
子  
の  
ま  
あ  
あ

おれりけり  
先は  
ひん  
うら  
むつ  
家と  
\*  
子  
の  
ま  
あ  
あ

おれりけり  
先は  
ひん  
うら  
むつ  
家と  
\*  
子  
の  
ま  
あ  
あ

おれりけり  
先は  
ひん  
うら  
むつ  
家と  
\*  
子  
の  
ま  
あ  
あ

おれりけり  
先は  
ひん  
うら  
むつ  
家と  
\*  
子  
の  
ま  
あ  
あ

おれりけり  
先は  
ひん  
うら  
むつ  
家と  
\*  
子  
の  
ま  
あ  
あ

おれりけり  
先は  
ひん  
うら  
むつ  
家と  
\*  
子  
の  
ま  
あ  
あ











初と亦をさし海より  
人よりいぬ  
かばきし海  
秘 貞良なるか中よりふちと海のそをさし  
義玄へよまひぬし又きゆかしくまこと

奇によめれしとつらいましぬし  
中平云うらまされつ建るを海程よりいひあられ別と海  
のそいぬをさし又けまされ始りわらうるまき中しに海に別れぬ  
身と海の妙とつらまきと海によまひぬし又きぬし

さしれとかちをさし  
つらまきと海によまひぬし  
つらまきと海によまひぬし  
思義なるか海のちりまきん中し海をさし  
つらまきと海によまひぬし

つらまきと海によまひぬし  
つらまきと海によまひぬし  
つらまきと海によまひぬし  
つらまきと海によまひぬし

つらまきと海によまひぬし

あひぬあてさしまきん中し海にちりまきと海によまひぬし  
あひぬあてさし  
あひぬあてさし  
あひぬあてさし

あひぬあてさし  
あひぬあてさし  
あひぬあてさし  
あひぬあてさし

義日し

*[Faint, illegible handwriting on the right page, possibly bleed-through from the reverse side.]*

